長特研だより

第１２５号

発　行　長崎県特別支援教育研究会
事務局　長崎県立鶴南特別支援学校
編集局　長崎県立虹の原特別支援学校
発行日　令和５年１２月　６日

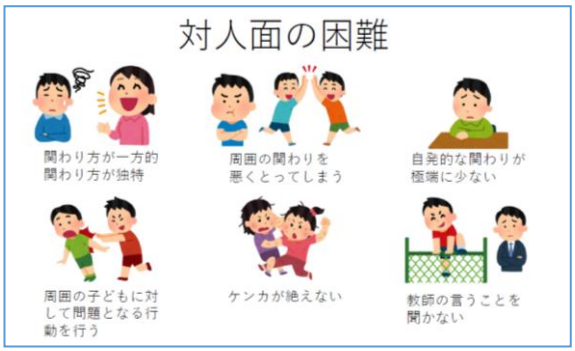
令和5年10月26日（木）に、たらみ図書館 海のホールで、秋期研修会を開催しました。
当日は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校から合計41名の先生方に参加していただきました。
本号では、研修会の講演内容について報告します。

令和5年度長崎県特別支援教育研究会秋季研修会報告

演題 ：「対人面に困難のある児童生徒への支援について」

講師 ： 長崎大学教育学部　　准教授 髙橋 甲介 先生

【 講演内容 】



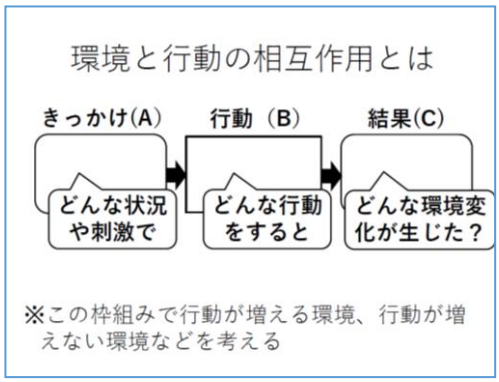
1 行動の理由を理解

○行動や症状を障害名で理解すること
⇒障害名は行動群のラベルであり、あまり問題解決にはつながらない。

○子供の行動の理由を理解する観点（特性×環境）
⇒特性だけでなく環境面も併せて考える

○特性×環境で考えるメリット
⇒環境の違いで、特性が重篤な困難に結び付かない可能性を高めることができる。（少しの工夫）

○「特性を変える」は難しい、「環境を変える」は比較的可能なこと（どのように環境を変えるか）
⇒応用行動分析学が役に立つ



2 応用行動分析学の特徴

○応用行動分析学
⇒行動そのものに着目し、環境がどのように影響しているのかを考えることで、様々な課題を理解し解決していく学問のこと

○環境と行動の相互作用
⇒右図を参照

○学習の原理（正の強化・負の強化・消去）
⇒「行動が増える環境と行動の相互作用」と「行動が減る環境と行動の相互作用」

○応用行動分析学に基づく支援
⇒望ましい行動を増やす強化の環境と不適切な行動を減らす消去の環境を作ること

3 対人面の困難への対応

〇直前の環境（きっかけ）の違いによる影響

⇒きっかけの違いで望ましい関わりや不適切な関わりの生じやすさは変化する

〇行動の結果の違いによる影響

⇒結果の違いで、望ましい関わりや不適切な関わりの生じやすさは変化する

〇行動の負荷等の違いによる影響

⇒望ましい関わり行動をするのが大変だったり、恥ずかしかったり、できなかったりすると、不適切な関わり行動が増える

4 応用行動分析学による対人面の困難への対応

〇対人面の困難を分析する

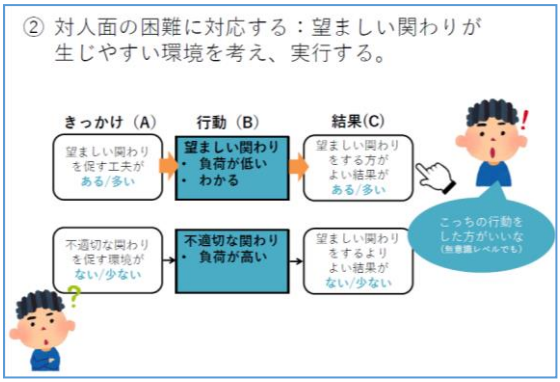
⇒望ましい関わりが生じにくい環境になっていないか仮説を立てる

〇対人面の困難に対応する

⇒望ましい関わりが生じやすい環境を考え、実行する

〇仮想事例の分析・対応・きっかけの工夫

⇒望ましい関わりが少ない理由から、対応策を考える



【 質疑応答 】

質問		高橋先生の回答
いろいろな学びを必要とする子供がいる場合、ユニバーサルデザインとしての環境は必要か？	➡	本日の講演は、個別対応でしたが、前提としてユニバーサルデザインは必要である。学級全員が分かるような活動や全体のルールがあるとよい。それでも難しい場合は、個別に対応する。何段階かの構えは必要である。
望ましい行動のきっかけを見つけるこつは？	➡	問題行動のきっかけに目が行きがちだが、ちゃんとできているときの前の状況や行動とその状況を集めることが、ヒントになる。どんなときに良くて、どんなときに悪いかだけでもよい。
早期に対応をした方がよいと思うが、大人に近付く年齢でも行動を改善できるのか？	➡	自傷や他傷は小さければ小さい方（小3程度まで）がよい。大きくなってからでも環境を変えると改善することはある。不適切な行動が、重篤すると簡単なレベルから取り組む（2分でも OK）。今できることから少しずつ取り組むとよい。
学校（高等部）を卒業した後の指導を望めるのか？実社会にそのような支援をする余裕はあるのか？引継ぎについてどう考えるか？	➡	援助要求を言えるようになることは大事なこと。 社会に関しては、実際難しい状況であるが、支援を具体的にして引き継ぐことが必要だと個人的には考えている。

当日の講演では、事例に基づいた丁寧なご説明で多くのことを学ぶことができました。

長特研のホームページに講演資料を掲載しますので、当日参加できなかった会員の方は、是非ご覧ください。